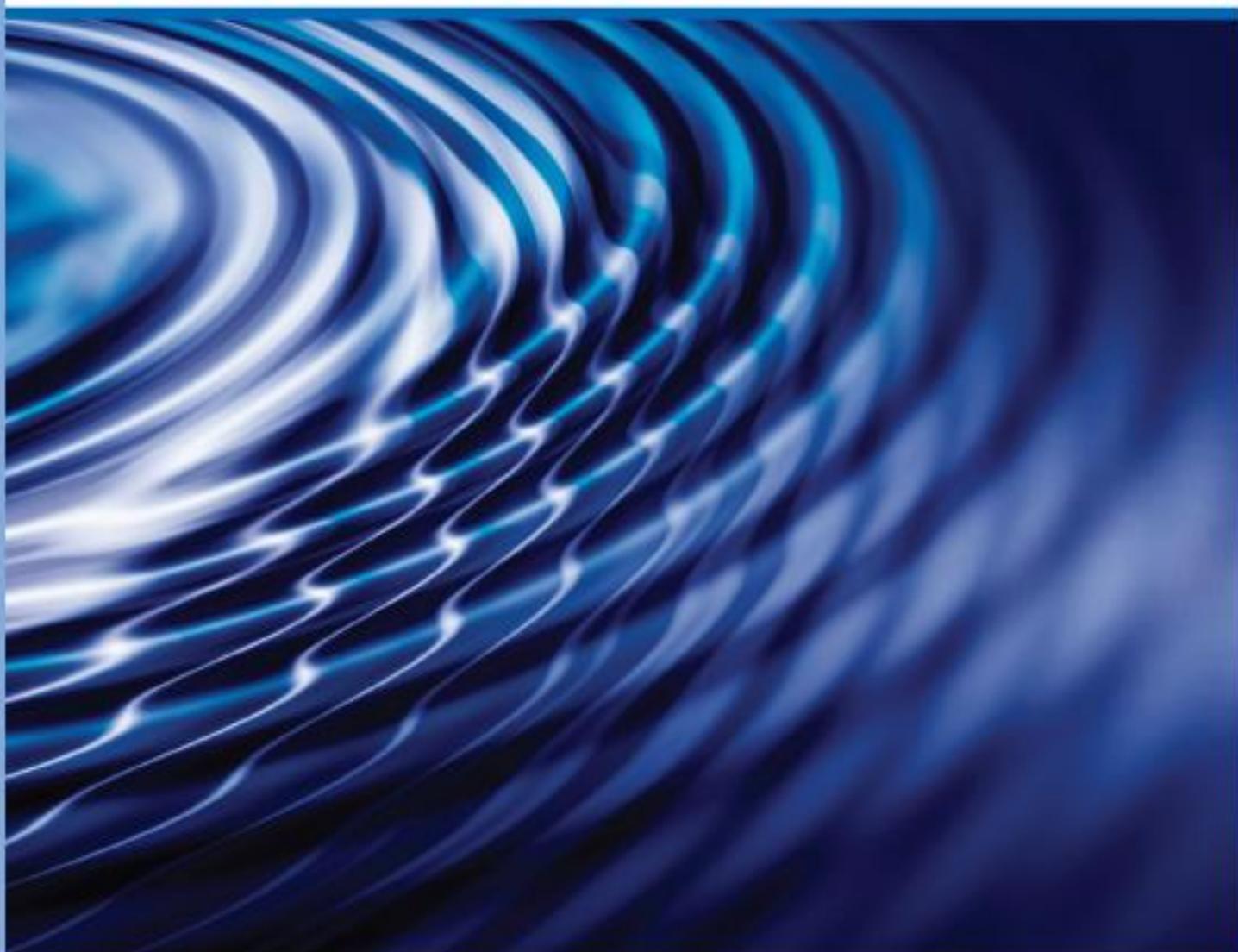


Reflection X Advantage
の評価



Attachmate®
Reflection®



Reflection X Advantage の評価

バージョン 4.2



目次

| | |
|---|-----------|
| Reflection X Advantage: 次世代の X サーバ | 5 |
| Reflection X Advantage 機能 | 5 |
| ご自分の目でお確かめください | 7 |
| 単体モードでの X マネージャの使用 | 9 |
| XDMCP セッションの起動 | 10 |
| X クライアントセッションの起動 | 10 |
| セッションの状況の監視 | 12 |
| 別のユーザとのセッションの共有 | 12 |
| 低速ネットワークでのパフォーマンス向上 | 14 |
| ショートカットの作成 | 16 |
| ドメインモードの使用 | 17 |
| サンプルドメインの設定 | 17 |
| 管理コンソール | 18 |
| 認証 | 19 |
| Windows 資格情報を使用した認証 | 19 |
| Reflection X 内部認証の使用 | 20 |
| 公開セッション設定の作成および使用 | 20 |
| X マネージャ (ドメイン接続用) によるセッションの作成 | 21 |
| 設定の公開 | 22 |
| 公開セッションによる新規ユーザの開始 | 23 |
| ドメインモードでのセッションの共有 | 23 |
| 別のユーザにセッションの使用を許可 | 23 |
| 提供セッションへの参加 | 24 |
| ドメインモードでのリモートセッションサービスの使用 | 25 |
| ドメインノードの設定 | 25 |
| リモートセッションサービスを使用したリモート作業 | 26 |
| 特別なセッション保護の適用 | 27 |
| ネットワークパフォーマンスの最適化 | 28 |
| Reflection X 設定の移行 | 29 |
| 移行した設定のインポート | 29 |
| 移行したセッションの起動 | 29 |

Reflection X Advantage: 次世代の X サーバ

Attachmate の Reflection X Advantage は、地理的に分散した現代の組織および IT 環境向けに最適化された新しい X サーバです。Reflection X Advantage は、Reflection X 2011、Reflection Suite for X 2011 に付属し、Reflection X バージョン 14.x をご使用の保守契約をされたお客様も無償で入手できます。

Reflection X Advantage には、単体モードとドメインモードという 2 種類の動作モードがありますが、このガイドでは両方をテストする機会を用意しています。

Reflection X Advantage 機能

単体モードは、1 つのアプリケーション（既定でインストールされている X マネージャ）で提供されます。以前の Reflection X 製品のユーザにとっては、単体モードの Reflection X Advantage（ミッションクリティカルな X アプリケーションに確実かつシームレスにアクセスできるようにするバレットプルーフ X サーバ）はなじみの深いものでしょう。

ドメインモードでは、単体モードの全機能に加え、コスト増加なしで生産性を向上させることができる追加機能が補足されています。ドメインモードは複数のコンポーネント（X マネージャ（ドメイン接続用）、X 管理コンソール、および Reflection X サービス）で構成されます。これらの機能は既定ではインストールされません。また、ドメイン内のシステムごとに、別々のコンポーネントが必要です。

どのモードを選択しても、次の機能にアクセスできます。

- **複数のプラットフォームに対応:**Reflection X Advantage を使用すると、過去最多の種類のデスクトップ環境（Windows 7、Windows Vista、Windows XP、Linux、Solaris、HP-UX、Mac など）から X ホストと X アプリケーションにアクセスできます。
- **リアルタイムの共同作業:**Reflection X Advantage のセッション共有/転送機能によって、同僚が同じアプリケーションを同時に見たり、1 人のユーザから他のユーザにセッションの制御を転送したりすることができます。
- **パフォーマンス向上のオプション:**Reflection X Advantage を使用すると、リモートセッションサービスを使用して狭い帯域幅や遅延の多い接続の問題を解決することができます。Reflection X の分散セッションを構成する際には、表示の更新に必要なプロトコルのみがネットワーク経由で送信されます。このため、遅延が多い場合のパフォーマンスが大幅に向上します。帯域幅が狭い場合、Reflection X はリモート X サーバに送信するプロトコルを自動的に圧縮します。
- **FIPS 140-2 検証に対応した完全統合 Secure Shell:**Reflection X Advantage を使用すると、X サーバと統合されたシングルベンダのセキュリティソリューションを利用できます。
- **X11 の拡張機能に対応:**Reflection X Advantage は、**GLX、Render、Damage、Shape、XFixes** などの主要な X11 の拡張機能に対応しています。
- **全角文字を入力するためのネイティブ IME に対応:**ネイティブ IME への対応により、ご使用のワークステーションの入力方式エディタ（IME）を使用して（日本語、韓国語、中国語などの）文字を構成できます。Reflection PKI Services Manager の XIM（X11 Input Method）サーバは、構成されたテキストを IME から取得し、XIM を認識するクライアントに渡します。新しい入力方法を習得しなくてもさまざまな X クライアントで作業できます。
- **X.509 証明書の認証:**Secure Shell 接続には、ユーザ認証とホスト認証の両方が必要です。Reflection X Advantage は、ユーザ認証の標準オプション（パスワードと公開鍵）のほか、X.509 証明書を使用した認証にも対応しています。証明書は、Reflection X Advantage ストア、ローカルディレクトリ、Windows 証明書ストア、スマートカードなどのデバイスに保存できます。また、Reflection PKI Services Manager をダウンロードしてインストールすると、X.509 証明書を提示するホストを認証するように Reflection X Advantage を構成することができます。Reflection PKI Services Manager は別個のダウンロードとして提供されていますが、追加料金はかかりません。

ドメインモードで使用できる追加機能は次のとおりです。

- **セッション構成の一元化:**Reflection X Advantage のドメイン機能によって、エンドユーザのセッション設定が簡単になりました。管理者は 1 つの場所で一元的にセッションを作成、保持し、ユーザに対してこれらのセッションへのアクセスを許可することができます。ユーザはこのように一元的に構成されたセッションを使用することで迅速に作業を開始できます。また、自分のワークステーション上で各セッションを作成、構成することができます。
- **会社や自宅、外出先などから確立されたセッションへの柔軟かつ迅速なアクセス:**ある場所でセッションから抜けて、別の場所からそのセッションに再び参加できます。クライアント接続の再確立に時間はかかりません。
- **セッションの保護:**実行中のセッションから抜ける際に、フェイルオーバーを使用してセッションが失われないよう保護することができます。このオプションを使用すると、ネットワークやハードウェアに障害が発生しても、抜けた時の状態で作業に戻ることができます。
- **ドメイン認証サービス:**現在の認証プロセスを利用して、Reflection X Advantage のドメイン認証を行います。次のいずれかの認証方法を使用します。Windows、PAM (Pluggable Authentication Modules)、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol)、または Reflection X 内部。
- **負荷分散:**分散セッション環境では複数台のコンピュータに Reflection X Advantage がインストールされるため、セッションを複数のドメインノードで実行できます。セッションが開始されると、そのセッションは最も負荷の少ないドメインノードで実行されます。

機能の比較

| | 単体モード (X マネージャ) | ドメインモード (X マネージャ (ドメイン 接続用)) |
|--------------------------|--------------------|------------------------------------|
| X クライアントアプリケーションの起動および対話 | X | X |
| XDMCP | X | X |
| X セッションの共有 | X | X |
| X11 の拡張機能への対応 | X | X |
| 低速ネットワークでのパフォーマンス向上 | X | X |
| 統合された Secure Shell | X | X |
| FIPS 140-2 への対応 | X | X |
| X.509 証明書の認証 | X | X |
| X セッションの一元的な構成 | | X |
| X セッションからの退出および再参加 | | X |
| X セッションのフェイルオーバー | | X |

ご自分の目でお確かめください

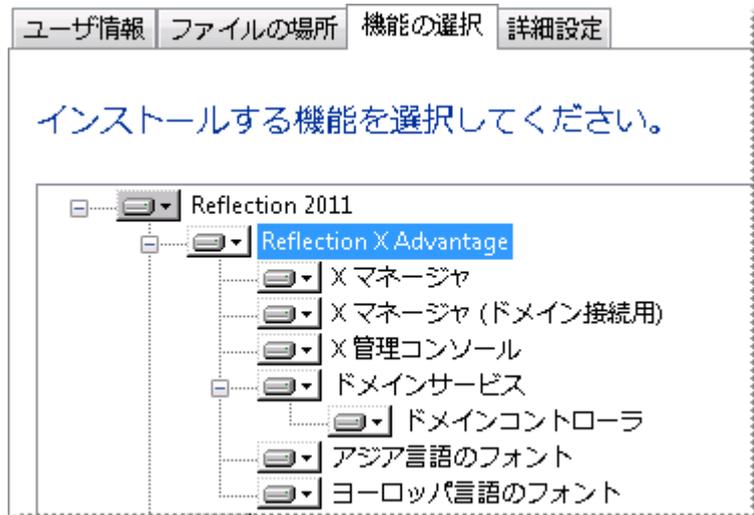
Reflection X Advantage は以下の製品に含まれています。評価版コピーを無償でダウンロードおよびインストールできます。

- Reflection X 2011
- Reflection Suite for X 2011

このガイドよりさらに詳しい情報が必要な場合は、*Reflection X Advantage* マニュアルページ『<http://support.attachmate.com/manuals/rxa.htm>』から完全な製品マニュアルを利用してください。

評価版コピーをダウンロードおよびインストールするには

- 1 PC X サーバ製品ページ『<http://www.attachmate.com/Products/PC+X+Server/pcxserver.htm>』で評価版コピーを申請します。製品の申請フォームに入力した後で、ダウンロードライブラリへのリンクが記載された電子メールを受け取ります。
- 2 電子メールのリンクをクリックします。ダウンロードライブラリが表示され、これを使用して Reflection X 2011 の評価版パッケージをダウンロードできます。
- 3 パッケージをダウンロードして実行すると、インストーラファイルを解凍する場所を指定するように求められます(最終的なプログラムファイルの場所ではありません)。これらのファイルの場所を選択して、**[次へ]** をクリックします。指定した場所にファイルが抽出され、Reflection インストーラが自動的に起動します。
- 4 インストーラは、システムの必要なソフトウェアの前提条件を確認します。必要なソフトウェアの前提条件が存在しない場合、インストーラは製品のインストールを実行する前にこれらのパッケージをインストールします。
- 5 この評価では、このコンピュータにすべての *Reflection X Advantage* 機能をインストールします。**[機能の選択]** タブで、**[Reflection X Advantage]** の横にある機能の選択ボタンをクリックして、**[機能をローカルのハードディスクドライブにインストールする]** を選択します。これにより、自動的にすべての機能がインストールするよう選択されます。



注意:単体の X マネージャを使用して X クライアントに接続するために、必要になるのはこのコンピュータだけです。このガイドで全機能を評価する場合は、ほかの追加システムに Reflection X Advantage の一部の機能をインストールします。詳細は、手順に記載されています。

単体モードでの X マネージャの使用

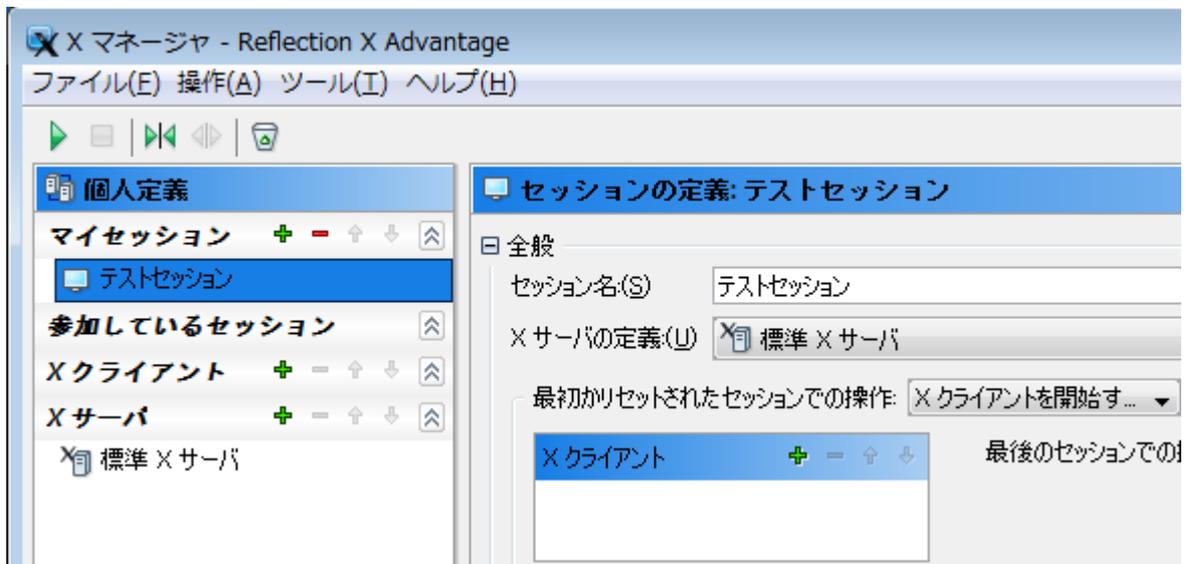
X クライアントに最もすばやく接続するには、単体の X マネージャを使用します。X マネージャは、X セッションを構成して起動するツールで、操作はとても簡単です。

X マネージャを起動するには

- Windows の [スタート] メニューから次のように移動します。
[すべてのプログラム] - [Attachmate Reflection] - [X マネージャ - Reflection X Advantage]

注意:Reflection の旧バージョンをインストールしており、**[移行の設定]** ダイアログボックスが表示された場合は、**[キャンセル]** をクリックします。これにより、評価時に既定の構成で作業できます。移行された設定は、後で簡単にインポートできます。詳細については、「Reflection X 設定の移行『[29ページ](#)』」を参照してください。

X マネージャを開くと、2 つのメイン領域（左側のナビゲーション画面と右側の定義画面）に分かれた画面が表示されます。左側の画面でエントリを選択すると、それに対応する定義が右側の画面に表示されます。



ナビゲーション画面では既定のセッション名である [(無題のセッション)] が選択されています。この名前が、セッションの定義を作成する開始ポイントです。

セッション定義は、X サーバの設定、XDMCP 接続、起動する X クライアントの一覧など、セッションを確立するために必要な事項すべてを指定する場所と考えてください。

XDMCP セッションの起動

この手順では、XDMCP を使用してホストデスクトップにアクセスします。すべての X ホストが XDMCP 接続に対応しているわけではありません。特定の X クライアントを起動するセッションを開始する手順については、「X クライアントセッションの起動『10ページ』」を参照してください。

XDMCP セッションを開始するには

- 1 X マネージャで、左側にある **【マイセッション】** から [(無題のセッション)] を選択します。

注意: 既定のセッションをすでに変更している場合は、**+** をクリックして新しいセッションを作成してください。

- 2 右側の **【セッションの定義】** 画面で、**【セッション名】** フィールドを編集します。ここでは、「テストセッション」という名前にします。

入力した名前は自動的に保存されます。

- 3 **【X サーバの定義】** が **【標準 X サーバ】** に設定されていることを確認します。これは、作成中のセッションの定義で使用されるサーバの定義です。サーバの定義には、このセッションで使用される X サーバインスタンスの設定が含まれます。

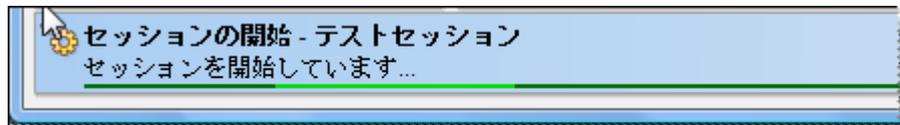
- 4 **【最初からリセットされたセッションでの操作】** で、**【XDMCP を開始する】** を選択します。

- 5 **【種類】** ボックスから **【直接】** を選択します。

- 6 **【ホスト名】** ボックスに、X ホストの名前を入力します。

- 7 **【マイセッション】** でセッションを選択している状態で、 をクリックします (または **【操作】** - **【起動】** を選択します)。

接続が確立されている間、[Reflection X マネージャ] ウィンドウの最下部の表示領域で、接続状況に関するメッセージを監視することができます。



- 8 ホストのログオン資格情報を入力します。接続が正常に確立されると、画面全体に X ホストのデスクトップが表示されます。

X クライアントセッションの起動

これらの手順で、X クライアントアプリケーションを起動するセッションを構成します。

注意:作業時に、変更は自動的に保存されます。

最初の手順では、新規のサーバ定義を作成します。サーバ定義を使用して、ディスプレイの基本設定を構成できます。次の手順では、Windows デスクトップに各クライアントウィンドウを直接表示するサーバ定義を作成します。この定義をすべてのクライアントセッションで再利用できます。

手順 1:サーバの定義を作成する

- 1 X マネージャの左画面で、**【X サーバ】** の横にある **+** をクリックします。
- 2 **【全般】** 領域の **【名前】** フィールドで、このサーバに「デスクトップ上のクライアント」という名前を指定します。

- 3 右側の **[サーバの定義]** 画面で **[ウインドウ]** 領域を開き、**[クライアントをデスクトップに表示する]** を選択します。

次の手順では、接続先のホスト、接続を確立する方法、および実行したい X クライアントアプリケーション（複数可）を指定するクライアント定義を作成します。

手順 2:クライアントの定義を作成する

- 1 X マネージャの左画面で、**[X クライアント]** の横にある **+** をクリックします。
- 2 **[クライアントの定義]** の **[名前]** で、このクライアントに「xterm」という名前を指定します。
- 3 **[ホスト名]** に、X クライアントアプリケーションをホストするコンピュータの名前と IP アドレスを指定します。
- 4 ドロップダウンリストから **[ホストの種類]** を選択します。

注意:ホストの種類を変更すると、**[コマンド]** ドロップダウンリストで使用できるサンプルクライアントコマンドのリストが変更されます。

- 5 **[接続方法]** の既定値は **[Secure Shell]** です。このオプションを選択したまま残します。
- 6 **[ユーザ名]** に、このホストでの自分のユーザ名を入力します。
- 7 **[アプリケーション]** の既定値は **[単一コマンド]** です。このオプションを選択したまま残します。
- 8 **[コマンド]** テキストボックスで、ドロップダウンリストを使用して、サンプルの **xterm** コマンドを選択します。



最後の手順では、このセッションを実行するときどの X サーバを使用し、どのクライアント（複数可）を起動するかを指定するセッション定義を作成します。この例では、クライアントアプリケーションを閉じるとセッションが自動的に停止するようにも構成します。

手順 3:セッションを作成し、起動する

- 1 左画面で、**[マイセッション]** の横にある **+** をクリックします。**[セッション名]** に「テスト xterm セッション」を使用します。
- 2 **[X サーバの定義]** 一覧から、以前に作成した「デスクトップ上のクライアント」のサーバ定義を選択します。
- 3 **[最初リセットされたセッションでの操作]** の既定値は **[X クライアントを開始する]** です。このオプションを選択したまま残します。

注意:次の手順では、クライアントを自動的に開始するようにセッションを構成します。この手順を行わず、セッションが実行された後にクライアントを手動で開始することもできます。

- 4 **[最初リセットされたセッションでの操作]** の下で、**+** をクリックしてクライアントを **[X クライアント]** 一覧に追加します。**[クライアントの追加]** ダイアログボックスで、作成した「xterm」のクライアント定義を選択し、**[OK]** をクリックします。
- 5 **[最後のセッションでの操作]** 一覧で、**[セッションを停止する]** を選択します。(このオプションを選択すると、クライアントアプリケーションを閉じるとき、セッションは自動的に停止します。)
- 6 ツールバーから **▶** をクリックしてセッションを開始します。(また、セッション名を右クリックしてコンテキストメニューで **[起動]** コマンドをクリックするか、セッション名を選択して **[操作] - [起動]** コマンドをクリックするか、セッション名をダブルクリックすることで、セッションを開始することもできます。)

注意:初めて Secure Shell を使用してホストに接続すると、**[不明なホスト鍵]** ダイアログボックスが表示されます。これは、このホストを認証するために必要な鍵がまだホスト鍵データベースに含まれていないことを示します。ホストの管理者は、このダイアログボックスに表示される指紋を使用して、ユーザに正しいホストに接続していることを確認させることができます。この要求に対して **[常時]** をクリックすると、認識されたホスト鍵データベースにこの鍵が追加され、このプロンプトは表示されなくなります。

セッションの状況の監視

X セッションを確立すると、セッションの状況が、[Reflection X マネージャ] ウィンドウの右側の **[セッションの定義]** 領域に表示されます。



別のユーザとのセッションの共有

ここで、ある同僚からプロジェクトで共同作業をしたいという連絡を受けた、という状況を想定してみましょ。Reflection X Advantage のピアツーピアのセッション共有機能を使用すれば、これを簡単に実現できます。

単体モードでセッションを共有するには、両方のユーザが、それぞれのコンピュータで Reflection X Advantage の単体の X マネージャを実行している必要があります。

セッション共有をテストする 2 台目のコンピュータを構成する

- 1 2 台目のコンピュータでインストールを実行します。
- 2 既定値を使用してインストールします。単体の X マネージャがインストールされます。このテストに必要なのは、X マネージャだけです。

共有セッションを設定するには

- 1 最初のコンピュータ（最初のテストセッションを作成したコンピュータ）で X マネージャを起動します。
- 2 **[マイセッション]** で、セッション（この例では「テストセッション」または「テスト xterm セッション」）を選択し、 をクリックして（または、**[操作] - [起動]** を選択して）、セッションを起動します。
- 3 セッションが確立されたら、X ウィンドウでいくつか変更を行います。例えば、XDMCP を使用している場合、X デスクトップセッションでアプリケーションを起動します。xterm ウィンドウを起動している場合、端末ウィンドウで `ls`、などのコマンドを入力します。
- 4 **[Reflection X マネージャ]** ウィンドウに戻ります。Reflection X ウィンドウの右側の **[セッションの状況]** 領域で、**[接続先の URL]** フィールドの下の **[共有]** ボタンをクリックします。これにより、セッションが共有され、一意の接続先 URL が作成されます。
- 5 このウォークスルーの場合は、**[セッションの制御をユーザに許可する]** を選択します。
- 6 **[URL のコピー]** をクリックして、接続 URL をクリップボードにコピーします。
- 7 URL を電子メールメッセージに貼り付け、そのメッセージを、2 番目のシステムで受け取ることができる電子メールアカウントに送信します。

これで、ほかのユーザは、以下に示す手順に従ってセッションに参加し、セッションを制御できるようになります。セッションは、そのセッションを終了するまで、または **[共有しない]** を選択して、現在のセッションの共有を停止し、セッションに参加している外部のユーザを切断するまで、使用可能な状態に維持されます。

2 番目のユーザとしてセッションに参加するには

- 1 2 台目のコンピュータで X マネージャを起動します。
- 2 ツールバーにある緑色の二重矢印の **[参加]** ボタンをクリックします。



（または、**[操作] - [参加]** を選択します。）

これにより、**[セッションに参加]** ダイアログボックスが開きます。

- 3 前の演習で作成した接続先の URL を入力し、**[OK]** をクリックします。

このコンピュータ上に、起動したアプリケーションが表示され、セッションのウィンドウが開きます。これで、2 番目のユーザとして、最初のユーザのセッションの内容をすべて表示できます。**[セッションの制御をユーザに許可する]** を選択してセッションを構成したため、2 番目のユーザは共有セッションを制御できるようになります。以下に手順を示します。

2 番目のユーザとして共有セッションを制御するには

- 1 左のナビゲーション画面の **[参加しているセッション]** の下で、参加しているセッションの名前を見つけ、セッション名を右クリックします。
- 2 **[制御の取得]** を選択します。これで、共有セッションでキーボードとマウスを制御できます。
- 3 セッションのオーナーまたはほかの許可されているユーザは、それと同じ手順、つまり、セッション名を右クリックして **[制御の取得]** を選択することで、制御を取り戻すことができます。

注意:誰が制御を取得しているかに関係なくセッションの開始/停止やセッションの共有の停止を行えるのは、セッションのオーナーだけです。

低速ネットワークでのパフォーマンス向上

Reflection X Advantage のリモートセッションサービス機能を使用することによって、ネットワークに遅延が多い、帯域幅が狭いといった問題がある場合にパフォーマンスを向上させることができます。この構成であれば、VPN 経由で接続している場合に XDMCP を使用して問題を解決することもできます。単体の X マネージャからこの機能に対応するには、以下に説明するように、**リモートセッションサービス**機能を X クライアントホストにインストールします。

注意:以下の手順は単体の X マネージャを使用します。X マネージャ (ドメイン接続用) を構成して、高遅延または低帯域幅の問題に対応することもできます。Reflection X Advantage ドメインを設定すれば、このサポートは、Reflection X Advantage を X クライアントホストにインストールするという追加手順を行わずに使用可能になります。ドメイン設定についての情報は、Reflection X Advantage のヘルプで「ドメインの設定: 低速ネットワークでのパフォーマンス向上」を検索してください。

リモートセッションサービスが有効になっている場合は、セッションを起動すると Reflection X Advantage によって 2 つの X サーバが作成されます。X サーバディスプレイがワークステーション (左下に表示) で実行され、2 つ目の「ヘッドレス X サーバ」が X クライアントホスト (右側に表示) で実行されます。遅延の多いネットワークの場合、この構成によってネットワーク上のデータ交換が短絡化され、パフォーマンスが向上します。ヘッドレス X サーバがクライアントホスト (または近くのホスト) で実行されていると、ディスプレイの作成に必要なクライアント/サーバのデータ交換がクライアントとヘッドレス X サーバの間で行われますが、これがワークステーションの X サーバディスプレイにネットワークを介して送信されることはありません。この結果、ラウンドトリップネットワークメッセージの数が削減されるため、ワークステーションでの応答時間を短縮できます。また、ネットワークの帯域幅が狭い場合に、リモートセッションと X サーバディスプレイの間のプロトコルが圧縮されます。



リモートセッションサービスに対応するよう X クライアントホストを構成するには

1 ダウンロードライブラリページに戻り、X クライアントを実行している UNIX システム用のパッケージをダウンロードし、このファイルを X クライアントホストにコピーします。

2 ダウンロードファイルを解凍します。例:

```
unzip rx-advantage-4.2.0.6-eval-linux.zip
```

展開されたダウンロードファイルには、さまざまなプラットフォームにインストールするためのバイナリファイル (*.bin) が含まれています。UNIX プラットフォームに適したファイルを確認します。

3 ルートとしてログオンし、インストールファイルを含んでいるディレクトリまで移動します。

4 インストールパッケージの権限を変更して、ファイルオーナーに実行権限を与えます。例:

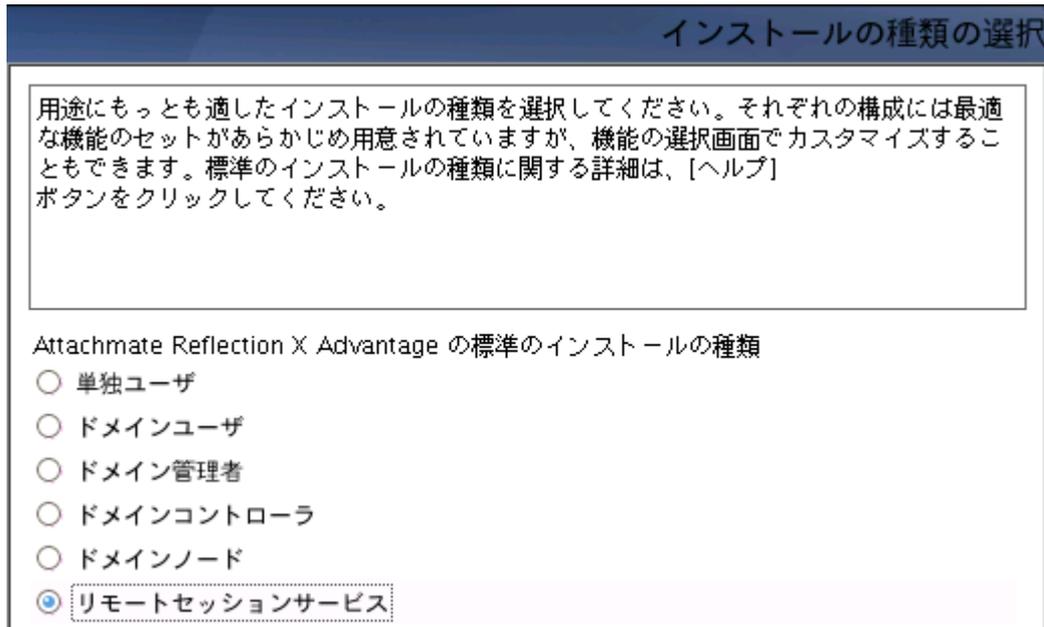
```
chmod 744 rxa-4.2.0.6-eval-i586-linux.bin
```

5 インストールプログラムを起動します。例:

```
./rxa-4.2.0.6-i586-linux.bin
```

注意:上記のコマンドは、X11Windows ディスプレイが必要な InstallAnywhere インストールプログラムを起動します。グラフィカルディスプレイがない場合、インストールはコンソールモードで実行されます。

- 6 **【インストールの種類を選択】** 画面で、**【リモートセッションサービス】** を選択します。



- 7 既定値を使用してインストールを完了します。

リモートセッションサービスを使用するセッションを構成および起動するには

- 1 テストセッションを作成したコンピュータで X マネージャを開始します。
- 2 **【マイセッション】** で、使用するセッション定義を選択します。
- 3 **【セッションの定義】** 画面の **【リモートセッションサービス】** で、以下の操作を実行します。
 - **【遅延の多いネットワークのパフォーマンス】** を選択します。
 - **【ホスト名】** に、X クライアントホストの名前を指定します。
 - **【ユーザ名】** に、X クライアントホストでの自分のユーザ名を指定します。
- 4 セッションを開始します。

注意:X クライアントを起動するセッションを構成済みの場合は、複数のパスワードプロンプトが表示されます。最初のプロンプトでは、リモートセッションサービスに対する認証を行います。追加のパスワードプロンプトで、X クライアントを起動できます。次の手順を使用して、シングルサインオンを構成できます。

- 5 **【X サーバ】** の下の **【セッションの状況】** 領域に、使用するワークステーションコンピュータのエントリが表示されます。ネットワーク接続で遅延が多く発生している場合は、X クライアントホストで実行されているヘッドレス X サーバの追加エントリが表示されます。

次の手順では、「リモートセッションサービス」という接続方法を構成します。この種類の接続では、シングルログオンプロンプトで認証を行います。

X クライアントとリモートセッションサービスのシングルサインオンを構成するには

- 1 **[X クライアント]** で、上記で使用した X クライアント定義を選択します。
- 2 **[接続方法]** を [リモートセッションサービス] に設定します。
- 3 セッションを開始します。

シングルログオンプロンプトが表示されます。入力した資格情報によって、リモートセッションサービスと X クライアントホストの両方に対する認証が行われます。

ショートカットの作成

Windows を実行している場合は、デスクトップショートカットを作成してセッションを起動することができます。

ショートカットを作成するには

- 1 X マネージャの **[マイセッション]** で、セッションを右クリックし、**[ショートカットの作成]** を選択します。
デスクトップにショートカットが作成されます。
- 2 [X マネージャ] ウィンドウを閉じます。
- 3 新しいショートカットを使用してセッションを起動します(X マネージャが起動し、バックグラウンドで動作します。システムトレイに表示されるアイコンを使用して、[X マネージャ] ウィンドウを開くことができます)。

注意:管理者は、新しいユーザが簡単に起動できるように、ショートカットを構成し、配布することができます。単体の X マネージャ (rxmgr.exe) および X マネージャ (ドメイン接続用) (rxmgrdomains.exe) を起動するためのコマンドラインユーティリティについては、Reflection X のヘルプに記載されています。

ドメインモードの使用

単体モードで X マネージャを使用してセッションを開始し作業する方法について確認しました。次に、Reflection X Advantage をドメインモードで実行した時に使用可能ないくつかの高性能機能のメリットについて確認してみましょう。機能には、管理者と個別のユーザの両側面からみたメリットがあります。

管理者として、以下のことが可能になります。

- X サーバ、クライアント、またはセッションの設定を構成し、それらの設定をドメイン内のユーザが使用できるようにします。セッションのすべての設定を一元的に制御および管理できます。
- 低速ネットワークでのセッションの継続や改善されたパフォーマンスのようないくつかの利点がある分散型セッションを構成できます。
- 確立された認証システムを利用して、ドメインへのアクセスを制御できます。
- ドメイン内のコンピュータの負荷分散を構成して、システムリソースを最大限に有効活用できます。
- ドメイン内で実行中のすべてのセッションの状況を表示したり、ドメインのシステムリソースを表示したりできます。

ユーザとして、以下のことが可能になります。

- セッションを起動し、セッションから抜け、X マネージャを閉じて、後で同じコンピュータまたは別のコンピュータからセッションに参加することができます。
- 管理者が提供する公開定義を使用して、あらかじめ定義されたセッションを実行したり、独自のカスタマイズした個人用セッションを作成して実行したりすることができます。
- ドメイン内のほかのユーザと簡単にセッションを共有できます(単体モードでは、URL をほかのユーザに送信してセッションを共有します。ドメインモードでは URL の交換は不要です)。

サンプルドメインの設定

手順 1: Reflection X Advantage をインストールする

この評価では、2 台のコンピュータを使用します。

- **コンピュータ 1:** この評価では、コンピュータ 1 はドメインコントローラと管理者のワークステーションの両方になります。このコンピュータに Reflection X Advantage のすべての機能をインストールします。前の演習を実行した場合、このコンピュータはすでに構成されています。

このコンピュータの名前をメモしておきます。これは、*自分の Reflection X ドメイン名*になります。

- **コンピュータ 2:** これは、ユーザワークステーションです。このコンピュータに X マネージャ (ドメイン接続用) をインストールします(この機能は既定ではインストールされません)。セッション共有をテストするためにすでに 2 番目のコンピュータに X マネージャがインストールされている場合は、X マネージャ (ドメイン接続用) を含むようにそのインストールを変更することができます。

手順 2: ユーザアカウントを特定する

Windows ドメインでテストしている場合は、Windows ユーザアカウントを使用して評価することをおすすめします。有効な Windows アカウントは、Windows 資格情報を使用して Reflection X ドメインに認証できます。この認証オプションを使用して評価するには、次のように 2 つの異なる Windows アカウントにアクセスする必要があります。

- サンプルの管理者アカウント:管理者アカウントとして自分の Windows 資格情報を使用できます。
- サンプルのユーザアカウント:サンプルユーザアカウントの場合は、Windows ドメインにテストユーザアカウントを作成します (または、ドメイン内の別のユーザの資格情報を取得します)。

注意:2 つの異なる Windows ドメインアカウントにアクセスできない場合は、Reflection X 内部認証オプションを使用してユーザを追加し、認証する方法を示す代わりに手順を以下で説明します。

手順 3:ファイアウォールを構成する

ファイアウォールを実行中の場合は、Reflection X Advantage で使用するポートにファイアウォールを構成します。詳細については、Reflection X Advantage のヘルプを開き、[検索] タブで「ファイアウォール」を検索してください。

管理コンソール

ドメインモードでは、すべてのセッション情報がドメインコントローラで集中管理されます。この評価では、ドメインコントローラがすでにコンピュータ 1 (すべての機能をインストールしたコンピュータ) で起動し、動作しています。

管理コンソールの起動とログオン

- 1 コンピュータ 1 から、X 管理コンソールを開きます。

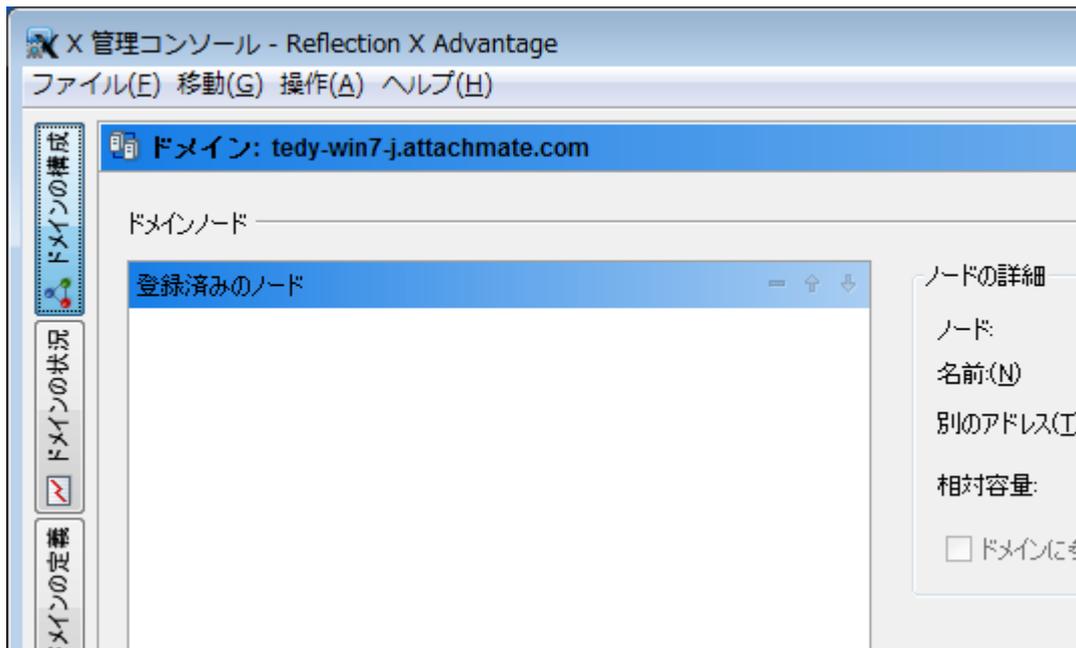
[スタート] - [すべてのプログラム] - [Attachmate Reflection] - [X 管理コンソール - Reflection X Advantage]

ログオンダイアログボックスが表示されます。Reflection X をドメインモードで実行している時は、常に、最初に Reflection X ドメインにログオンします。

- 2 ログオンダイアログボックスの [ユーザ名] と [パスワード] に、コンピュータのログオンに使用するものと同じ名前とパスワードを入力します。[ドメイン] フィールドに、コンピュータの名前を入力します。

注意:Reflection X ドメイン名は、常に、ドメインコントローラを実行しているコンピュータの名前になります。

ドメインへのログオンに成功すると、コンソールウィンドウの最上部にドメイン名が表示されます。



認証

「認証」タブのクイックツアーを利用すると、Reflection X ドメイン内のユーザの管理が簡単であることを理解できます。以下に 2 つの認証演習があります。最初のオプションを使用してテストするには、2 つの異なる Windows ドメインユーザのログオン資格情報にアクセスできる必要があります。複数のドメイン資格情報にアクセスできない場合は、Reflection X 内部認証を使用できます。

Windows 資格情報を使用した認証

Windows を実行しており、2 つの Windows ドメインアカウントにアクセスできる場合は、この手順を使用します(複数のアカウントにアクセスできない場合は、「Reflection X 内部認証の使用『20ページ』」を参照してください)。

Windows ドメイン内のコンピュータに Reflection X をインストールする場合、Windows 資格情報を使用してログオンが成功すれば、ユーザは Reflection X ドメインにアクセスできます。この演習では、サンプルユーザの認証をテストしてこの動作を確認します。実際のインストールでは、それに続くユーザは、Windows 資格情報を使って Reflection X ドメインへのログオンに成功した時に自動的に追加されます。

Windows 資格情報を使用して認証をテストするには

- 1 管理コンソールの左側に並んでいるタブの中から、**「認証」** をクリックします。以下の点に注意してください。
 - 自分の名前がすでにユーザアカウントの一覧に追加されており、**「管理者」** の下のチェックボックスが選択されています。既定では、最初にログオンしたユーザは、Reflection X ドメインの管理者として設定されます。
 - Windows システムでは、既定で **「認証システム」** が「Windows」に設定されています。
- 2 現在構成されている Windows ドメインを表示するには、**「構成」** をクリックします。何も変更を行わずにダイアログボックスを閉じるには、**「キャンセル」** をクリックします。**「正常にログオンした後、ユーザアカウントを自動的に作成する」** が選択されている場合(既定)、この Windows ドメインに認証できるすべてのユーザが自動的に Reflection X ドメインに認証できます。

- 3 **【認証のテスト】** をクリックします。**【ユーザの認証のテスト】** ダイアログボックスで、サンプルのユーザアカウントの名前とパスワードを入力します（このアカウントは、現在の Windows ドメインへのアクセスを持っている任意のアカウントでかまいません）。**【テスト】** をクリックします。

認証に成功すると、そのユーザが [ユーザアカウント] 一覧に自動的に追加されます。

評価を続行するには、「公開セッション設定の作成および使用『[20ページ](#)』」に進んでください。

Reflection X 内部認証の使用

Reflection X 内部認証を使用して任意の環境でテストすることができます。この認証オプションでは、手動でユーザを追加し、パスワードを設定する必要があります。

注意:初めてドメインにログオンしたときに管理者アカウントが作成されますが、認証は Windows (または UNIX または Mac 用の PAM) によって処理されるため、内部認証データベースにはこのアカウント用のパスワードの記録がありません。

内部認証システムを使用して管理者およびユーザアカウントを構成するには

- 1 管理コンソールの左側に並んでいるタブの中から、**【認証】** をクリックします。
- 2 **【認証】** システムを [内部] に設定します。
- 3 既存のアカウント名を選択し、 をクリック (または **【操作】** - **【ユーザパスワードの設定】** を選択) し、このアカウント用のパスワードを入力します。これは内部認証データベースに保存されます(このアカウントについては、**【管理者】** の下のチェックボックスはすでに選択されています)。
- 4  をクリック (または **【操作】** - **【新規ユーザ】** を選択) し、この演習用の追加サンプルユーザの名前とパスワードを入力します。
- 5 コンソールを閉じる前に、管理アカウントを使用してログオンできることを確認します。確認するには、**【認証のテスト】** をクリックし、管理者アカウントの名前とパスワードを入力し、**【テスト】** をクリックします。

"認証に成功しました。" というメッセージが表示されます。

公開セッション設定の作成および使用

管理者は、Reflection X ドメインを使用して公開セッション設定を作成することができます。これは、迅速かつ簡単にユーザをアクティブ化でき、トレーニングやサポートにかかる時間や費用を削減できることを意味しています。

- 2 台のコンピュータを使用します。
 - **コンピュータ 1** (すべての機能がインストールされているコンピュータ) が管理者用ワークステーションとドメインコントローラです。このコンピュータでは、X マネージャ (ドメイン接続用) を使用して、設定を構成およびテストし、次に、Reflection X 管理コンソールを使用してこれらの設定をほかのドメインユーザが使用できるようにします。
 - **コンピュータ 2** (X マネージャ (ドメイン接続用) のみがインストールされているコンピュータ) はユーザ用ワークステーションです。このコンピュータでは、X マネージャ (ドメイン接続用) により、公開セッションを使用して接続します。

X マネージャ (ドメイン接続用) によるセッションの作成

公開セッション定義を構成するには、X マネージャ (ドメイン接続用) を使って作業を開始します。単体の X マネージャの使用経験があれば、これは慣れ親しんだ領域といえるでしょう。

X マネージャ (ドメイン接続用) を使用して新規セッションを作成するには

- 1 コンピュータ 1 (すべての機能がインストールされているコンピュータ) から、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動します。

[スタート] - [すべてのプログラム] - [Attachmate Reflection] - [X マネージャ (ドメイン接続用) - Reflection X Advantage]

- 2 管理者アカウントの資格情報を使用してログオンします。(Windows 認証でテストしている場合は、Windows での自分の名前とパスワードを使用します。Reflection X 内部認証を構成した場合は、管理者アカウント用に設定したユーザ名とパスワードを使用します)。**[ドメイン]** フィールドに、コンピュータ名を入力します。

注意:Reflection の旧バージョンをインストールしており、**[移行の設定]** ダイアログボックスが表示された場合は、**[キャンセル]** をクリックします。これにより、評価時に既定の構成で作業できます。移行された設定は、後で簡単にインポートできます。詳細については、「Reflection X 設定の移行『[29](#)ページ』」を参照してください。

- 3 単体の X マネージャとは異なり、Reflection X マネージャ (ドメイン接続用) は、事前に構成済みのサーバ定義を備えていません。この手順では、既定の X サーバ (単体のアプリケーションにおける **[標準 X サーバ]** に該当する) を構成します。

[X サーバ] の右側にある  をクリックします。これにより、既定値を使用して新規のサーバ定義が作成されます。既定で、このサーバは「新規 X サーバ」と呼ばれます。ウィンドウ右側の **[サーバの定義]** 画面の **[名前]** フィールドを編集します。この演習では、名前を [既定の X サーバ] にします。変更した内容は自動的に保存されます。

- 4 **[マイセッション]** の右側にある  をクリックします。これにより、既定の名前 [新規セッション 1] を持つ新規のセッション定義が作成されます。ウィンドウ右側に表示される **[セッションの定義]** 画面の **[セッション名]** フィールドを編集します。この演習では、名前を [評価セッション] にします。

注意:手順 5 ~ 7 では、XDMCP 接続を構成します。セッションを作成して X クライアントアプリケーションに接続する場合は、これらの手順を「X クライアントセッションの起動『[10](#)ページ』」で説明している手順に置き換えてください。

- 5 **[最初からセットされたセッションでの操作]** で、**[XDMCP を開始する]** を選択します。
- 6 **[種類]** ボックスから **[直接]** を選択します。
- 7 **[ホスト名]** ボックスに、X ホストの名前を入力します。
- 8 **[評価セッション]** を選択し、 をクリック (または **[操作] - [起動]** を選択) してログオンし、設定を確認します。
- 9 セッションを終了するには、X マネージャ (ドメイン接続用) ツールバーの  をクリックします。

次の手順では、管理コンソールを使用して、このセッションをほかのユーザと共有する方法について学習します。

注意:管理コンソールを使用して新規のセッションを作成することもできます。この方法は、接続をテストする必要がない場合に使用することができます。上記で説明したように、X マネージャ (ドメイン接続用) を使用した場合は、セッションを公開する前に接続をテストできます。

設定の公開

設定を構成し終わったら、これらの設定をドメイン内の任意のユーザが使用できるようにすることができます。これを行うには、管理コンソールを使用します。

注意:セッション定義とサーバ定義の両方を公開する必要があります。

設定を公開するには

- 1 セッションを作成するのに使用したのと同じコンピュータ (コンピュータ 1) から、X 管理コンソールを起動します。

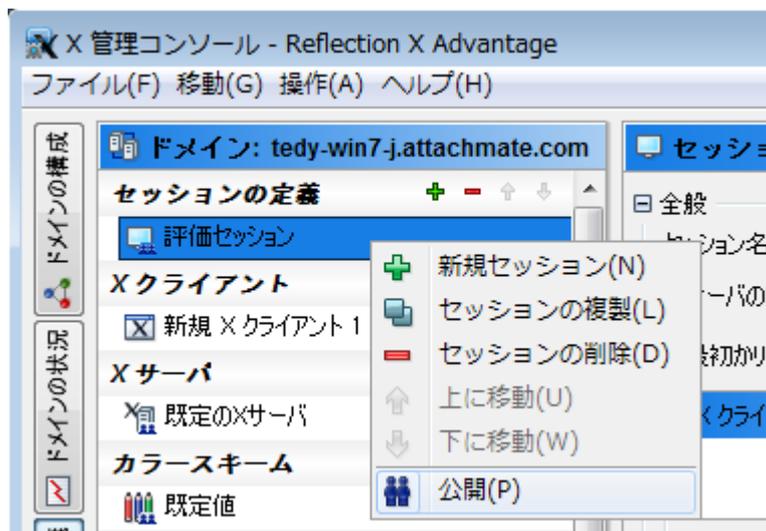
[スタート] - [すべてのプログラム] - [Attachmate Reflection] - [X 管理コンソール - Reflection X Advantage]

- 2 管理者の資格情報を使用してログオンします。
- 3 [ドメインの定義] タブをクリックします。[セッションの定義] で、作成したセッションを見つけます。

この段階では、このセッションはまだ個人用です。個人用セッション定義は、その定義を作成したユーザのみが表示、使用、変更できます。個人用セッションは以下の記号で識別します。

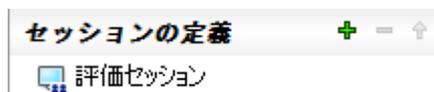


- 4 セッション名 (この例では「評価セッション」) を右クリックし、[公開] を選択します。



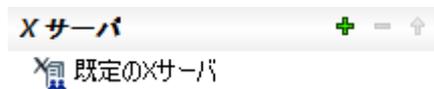
公開セッションは、ドメインにログインしているすべてのユーザが使用できますが、変更できるのは管理者だけです。公開セッションは以下の記号で識別します。

「評価セッション」は、以下のように、公開セッションであることが示されます。



- 5 [X サーバ] で、サーバ定義 (この例では、「既定の X サーバ」) を右クリックし、その定義を公開します。セッションの定義を作成した時は、このサーバの定義をベースにしていたため、この手順が必要です。ユーザは、セッション定義とサーバ定義の両方にアクセスする必要があります。

ここに示すように、サーバ定義のアイコンが変化して、その定義が公開されたことが示されます。



公開セッションによる新規ユーザの開始

設定はすべて完了しました。ここで、ホストアプリケーションの利用を開始する必要がある新規のユーザから連絡を受けた、という状況を想定してみましょう。作成した公開セッションを使えば、これを簡単に実現できます。

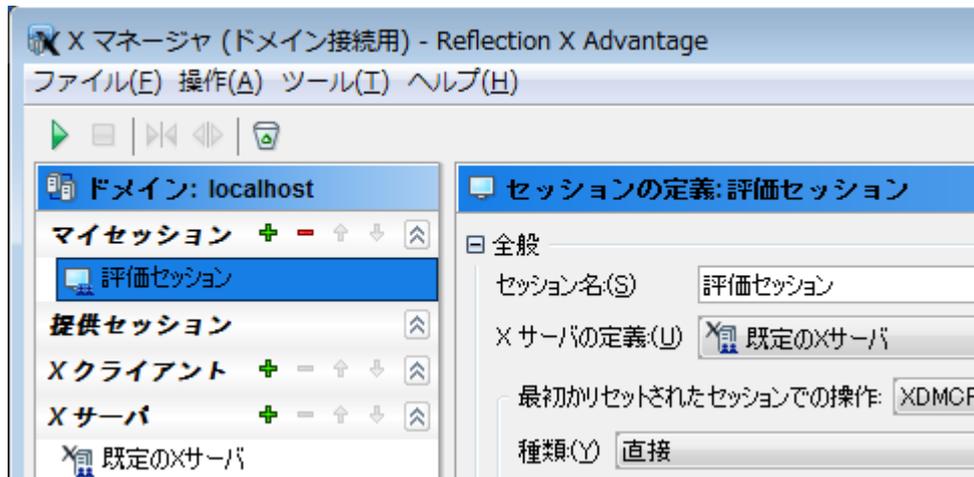
新しいユーザが知っておく必要があるのは、ドメインの名前とセッションの名前、およびユーザのログイン資格情報だけです。

ユーザが公開セッションを起動するには

- 1 ユーザのコンピュータ (コンピュータ 2) で、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動します。
([スタート] - [すべてのプログラム] - [Attachmate Reflection] - [X マネージャ (ドメイン接続用) - Reflection X Advantage] を選択します。)
- 2 テストユーザの資格情報を使ってログオンします。

注意:この初回のログオン時は、ユーザは X ドメインの名前を知っている必要があります。初回のログオンに成功後は、使用可能なドメイン名のリストにそのドメイン名が表示されるようになります。

- 3 [マイセッション] の下で、公開セッション (この例では「評価セッション」) を探します。この場合、ユーザはこのセッションの設定を変更できないことに注意してください。



- 4 [評価セッション] を選択し、▶ をクリックします (または [操作] - [起動] を選択します)。
すでに構成およびテスト済みの接続が確立されるため、サンプルユーザはすぐにアクティブ化されます。

ドメインモードでのセッションの共有

前の演習では、ユーザがホスト上の新規セッションに簡単にアクセスする方法について学習しました。ここでは、サンプルユーザが、現在熱心に取り組んでいる業務の一部を管理者ユーザに提示する場合を想定します。X マネージャ (ドメイン接続用) を実行中のすべてのユーザは、同じドメインに属しているほかのユーザと簡単にセッションを共有できます。

次の手順では、ドメインモードでのセッション共有の動作を示します。

別のユーザにセッションの使用を許可

この例では、サンプルユーザが実行中のセッションを別のユーザと共有する方法について説明します。ドメインモードで実行中のセッションを共有するために必要は操作は、1 人以上のユーザを [許可されているユーザ] 一覧に追加することだけです。

X マネージャ (ドメイン接続用) でセッションを共有するには

- 1 ユーザのコンピュータ (コンピュータ 2) で、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動し、公開の「評価セッション」を開始するか、使用する X クライアントを起動する新しいセッションを構成します。(共有するセッションは、公開である必要はありません。)
- 2 X マネージャ (ドメイン接続用) のウィンドウで、実行中のセッションの **「セッションの状況」** 領域を見つけます。アクティブなセッションについての情報に加えて、**「許可されているユーザ」** という構成可能な領域があることがわかります。



- 3 「許可されているユーザ」の右側にある緑色のプラス記号 (+) をクリックします。
- 4 **「ユーザと共有」** ダイアログボックスに、自分の管理ユーザ (および、ユーザアカウントを追加してテストした場合はその他のユーザ) の名前が表示されます。この一覧から管理者ユーザ名を選択し、**「OK」** をクリックします。

選択した名前が **「許可されているユーザ」** 一覧に表示されます。

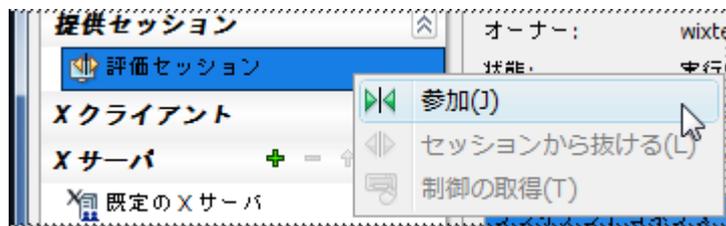
これで、管理者用ワークステーション (コンピュータ 1) からセッションに参加できるようになります。

提供セッションへの参加

上記の演習では、サンプルユーザによって共有セッションが提供されました。このセッションを表示するには、以下の手順を実行します。

提供セッションに参加するには

- 1 コンピュータ 1 で、Reflection X マネージャ (ドメイン接続用) を起動し、管理者の資格情報を使ってドメインにログインします。
- 2 **「提供セッション」** で、ユーザのコンピュータから共有された「評価セッション」を探します。その提供セッションを右クリックして **「参加」** を選択します。



- 3 新規セッションウィンドウが開きます。これで、2 番目のユーザとして、最初のユーザのセッションの内容をすべて表示できます。

セッションの制御の取得

セッションオーナーが、**[セッションの制御をユーザに許可する]** が選択されているセッションにユーザを追加している場合に限り、ユーザは、**[提供セッション]** の下のセッション名を右クリックし、**[制御の取得]** を選択するだけでセッションの制御を取得することができます。

セッションのオーナーまたはほかの許可されているユーザは、それと同じ手順、つまり、セッション名を右クリックして **[制御の取得]** を選択することで、制御を取り戻すことができます。

ドメインモードでのリモートセッションサービスの使用

ドメインモードでリモートセッションサービスを使用する場合、Reflection X は分散セッションを作成します。これは、一部のセッションコンポーネントが、X マネージャ (ドメイン接続用) が実行されているワークステーションではなく、リモートドメインノードで実行されることを意味します。この構成では、以下の機能を含む、基本セッションでは使用できない一部の機能を使用できます。

- セッションをサスペンドおよび再開する。
- 遅延の多いネットワークや帯域幅の狭いネットワークでパフォーマンスを向上する。
- 電源やネットワークの障害が原因でワークステーションが切断された場合でもセッションの実行を継続するための、フェイルオーバー。

これらのオプションに対応するためには、次の手順に従ってドメインノードを構成する必要があります。

ドメインノードの設定

ドメインノードを構成するには、**[ドメインサービス]** という機能をインストールする必要があります。この評価では、この機能をすでにインストールしたコンピュータ 1 にノードを作成します。実際のドメインを計画している場合、X クライアントを実行する UNIX ホストなど、任意の対応システムにノードを作成できます。

この手順で、以下のことが必要となります。

- 管理者アカウントを使用してコンピュータ 1 にログインする必要があります。
- ドメインコントローラを実行するコンピュータの名前 (この例ではコンピュータ 1) と、Reflection X のドメイン管理者のユーザ名およびパスワード (最初に X 管理コンソールを実行したときに使用した資格情報) を確認しておく必要があります。

ドメインノードを構成するには

- 1 コンピュータ 1 (すべての機能がインストールされているコンピュータ) から、コマンドプロンプトウィンドウを開きます (**[スタート]** - **[すべてのプログラム]** - **[アクセサリ]** - **[コマンドプロンプト]**)。

注意:一部の Windows システムでは、管理者としてコマンドプロンプトを実行することを指定する必要があります(この手順は、管理者としてすでにログインしている場合でも必要です)。これを行うには、**[スタート]** メニューで **[コマンドプロンプト]** ショートカットを右クリックし、**[管理者として実行]** を選択します。

- 2 次のコマンドを入力します。ここで、「domainname」はドメインコントローラを実行しているコンピュータ (コンピュータ 1) の名前です。

```
rxsconfig join domainname
```

- 3 管理者の資格情報を求められます。Reflection X のドメイン管理者のユーザ名とパスワードを入力します。以下の例に示すように、ノードが作成されたことを示すメッセージが表示されます。

```
C:\>rxsconfig join domainname
Initializing crypto library...
Performing the join...
Administrative user for domain: joe
Password:
Created node 0.0.0.0:22001 for domain domainname.
```

- 4 コンピュータ 1 で、X 管理コンソールを起動し、ドメイン管理者の資格情報を使用してログオンします。

- 5 **[ドメインの構成]** サイドタブをクリックします。

[登録済みのノード] の下に作成したノードが表示されます。

リモートセッションサービスを使用したリモート作業

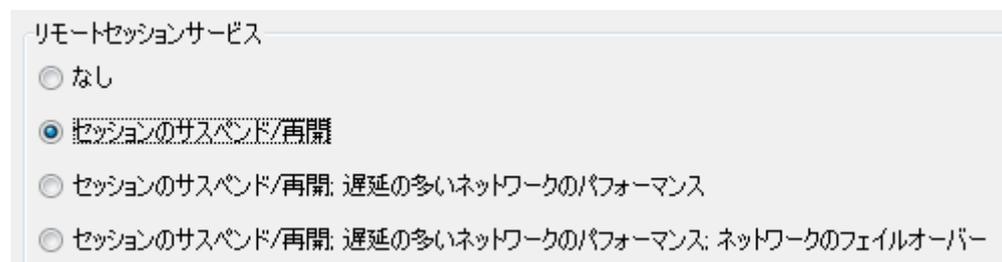
ほかのユーザと共同作業しない場合でも、Reflection X リモートセッションサービスから得られるメリットがあります。自宅のコンピュータと仕事先のコンピュータの両方から同じ X セッションを使用すると仮定します。コンピュータ間の移行がシームレスに行われるとともに、セッションを終了せずに自宅のコンピュータをシャットダウンできるようにします。

これ以降の手順は、これまでのシナリオで学習し作成した内容に基づいています。ここでは、作業に使用する 2 台のコンピュータに異なる名前を使用します。

- コンピュータ 1 (すべての機能がインストールされ、ドメインノードが構成されている) は「仕事先」のコンピュータです。
- コンピュータ 2 (X マネージャ (ドメイン接続用) がインストールされている) は「自宅」のコンピュータです。

片方のコンピュータでセッションから抜けてもう片方のコンピュータでセッションに再参加するには

- 1 両方のコンピュータで、実行されているセッションがあれば停止して、すべての Reflection X アプリケーションを閉じます。
- 2 仕事先のコンピュータ (コンピュータ 1) で、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動し、管理者の資格情報を使ってドメインにログオンします。
- 3 以前の演習で作成した [評価セッション] を選択します。
- 4 **[セッションの定義]** 画面の **[リモートセッションサービス]** で、**[セッションのサスペンド/再開]** を選択します。



- 5 セッションを開始し、通常作業を行っている任意のアプリケーションを起動します。
- 6 セッションを閉じずに、X マネージャ (ドメイン接続用) ツールバーの **[セッションから抜ける]** ボタンをクリックします。



- 7 X マネージャ (ドメイン接続用) を閉じます。
セッションは表示されなくなりますが、ドメインノードで引き続きアクティブに実行されており、ドメインコントローラによって維持されます。
- 8 自宅のコンピュータ (コンピュータ 2) に切り替えて、X マネージャ (ドメイン接続用) を起動します。仕事先のコンピュータでログオン時に使用したのと同じユーザ名、パスワード、およびドメイン名を使用してログオンします。
仕事先で抜けたセッションが **【マイセッション】** の下に表示されます。
- 9 セッション名を選択し、**【参加】** ボタンをクリックしてセッションに再び参加します。

実行中のままにして抜けたアプリケーションはそのまま表示されています。最初から接続またはセッションを確立し直す必要はありません。
- 10 仕事先に戻る前に作業がまだ完了しなかった場合は、自宅のコンピュータで **【セッションから抜ける】** ボタンをクリックします。これで、自宅のコンピュータをシャットダウンできるとともに、仕事先に戻って引き続きセッションに再参加できるようになります。

注意: X マネージャ (ドメイン接続用) を実行している場合は、自分だけが使用できる個人用セッションまたはほかのユーザと共有する公開セッションのいずれについても、リモートセッションサービスを使用するようセッションを構成できます。

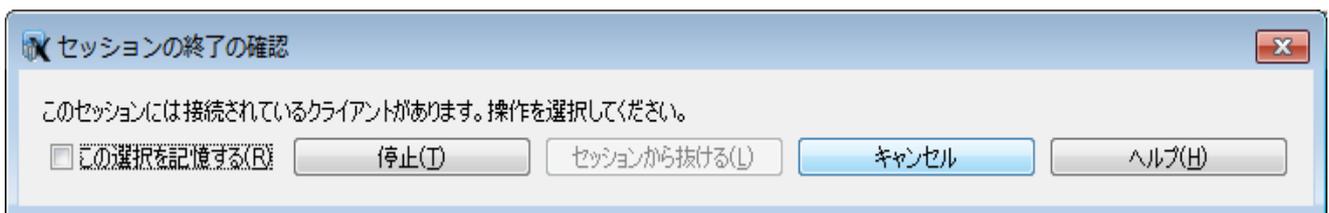
特別なセッション保護の適用

前の演習では、別のコンピュータからセッションを実行することで、セッションをサスペンドし、作業を再開する方法を示しました。その演習で示された構成では、仕事先のコンピュータもドメインノードであるため、仕事先のコンピュータが動作している必要があります。作業中のコンピュータでネットワーク接続が切れたり、予期せずシャットダウンしたりした場合でもセッションに戻ることができる、より高度なセッション保護を提供するように、Reflection X Advantage を構成することができます。

このレベルのセッション保護を提供するために、Reflection X はリモートドメインノード上にセッションを維持します。リモートドメインノードを構成するには、Reflection X インストーラを実行し、**ドメインサービス**と呼ばれる機能 (ドメインコントローラ機能は含まない) を選択します。その後で `rxsconfig` コマンドラインユーティリティ『[25ページ](#)』を使用してこのコンピュータ上にドメインノードを作成します。リモートノードは Windows、UNIX、または Mac システムにすることができます。

リモートドメインノードが使用できる場合は、**【リモートセッションサービス】** の下にある **【セッションのサスペンド/再開】**、**【遅延の多いネットワークのパフォーマンス】**、**【ネットワークのフェイルオーバー】** オプションを選択することができます。

このオプションを使用すると、セッションの実行中に X マネージャ (ドメイン接続用) を閉じた場合に、以下のプロンプトが表示されます。



【セッションから抜ける】 を選択した場合、このコンピュータをシャットダウンしても、セッションはリモートノードでアクティブのままです。この Reflection X Advantage ドメインにアクセス可能な任意のコンピュータから X マネージャ (ドメイン接続用) を起動すると、セッションに再度参加することができます。

[ネットワークのフェイルオーバー] を使用してセッションを構成している場合、コンピュータが予期せずにシャットダウンし、**[終了の確認]** プロンプトに回答できなくても、リモートドメインノードを実行しているコンピュータがシャットダウンされない限り、セッションはアクティブのままです。

ネットワークパフォーマンスの最適化

Reflection X Advantage ドメインモードは、単体モードと同様に、高遅延または低帯域幅による遅延のためにリモートの X クライアントアプリケーションを実行するのが困難になるネットワークでのパフォーマンスを大幅に改善するよう構成できます。

詳細については、Reflection X のヘルプを開いてください。[\[目次\]](#) タブから、[\[Reflection X ドメインの使用\]](#) - [\[サンプルドメインの構成\]](#) - [\[ドメインの設定: 低速ネットワークでのパフォーマンス向上\]](#) に移動します。

Reflection X 設定の移行

初めて Reflection X Advantage (単体の X マネージャまたは X マネージャ (ドメイン接続用)) を起動すると、従来の Reflection X 製品 (v. 13 または 14) からローカル設定が自動的に移行され、Reflection X 定義ファイル (*.rxd) に保存されます。従来の Reflection X ファイルは変更されません。移行された設定をインポートするかどうかをたずねるプロンプトが表示されます。初めてプロンプトが表示された時に、設定をインポートできます。後で設定をインポートすることもできます。

移行した設定のインポート

X マネージャまたは X マネージャ (ドメイン接続用) を最初に起動した時に旧来の Reflection X から移行した設定をインポートしないよう選択した場合は、後でこれを行うことができます。このオプションを使用すると、移行された設定をインポートする前に既定の構成を確認することができます。以下の手順を使用します。

移行した設定をインポートするには

- 1 X マネージャまたは X マネージャ (ドメイン接続用) から、**[ファイル] - [インポート]** をクリックします。
- 2 X マネージャまたは X マネージャ (ドメイン接続用) を最初に起動した時に、移行した設定を使用して定義ファイルが自動的に作成されます。Windows プロファイルフォルダでこのファイルを探します。ファイル名は、設定が移行された製品とバージョンを示します。例えば、Windows 7 でのパスとファイル名は次のようになります。

```
C:\Users\Joe\.attachmate\rx\migration\Reflection X 14_0_7.rxd
```

ファイルを選択して **[開く]** をクリックします。
- 3 **[定義のインポート]** ダイアログボックスで、使用可能なすべての定義を選択します。
- 4 **[インポート]** をクリックします。

旧来の設定をインポートしたら、それらをインポートした設定として使用したり、新しい Reflection X Advantage 機能を使用するようにインポートした設定を変更できます。旧来の設定は全く変更されません。

移行したセッションの起動

インポートした設定は、セッション、クライアント、サーバ定義の組み合わせとして、X マネージャに「(RX 移行済み)」と表示されます。移行した設定をインポートすると、移行したクライアントごとに移行したセッションが表示されます。

移行したセッション設定を使用してクライアントに接続するには

- 1 **[セッション]** で、起動するクライアントに基づいてセッション定義を探します。例えば、「マイクライアント」という旧来の Reflection X クライアントがある場合、次の移行したセッションが見つかります。
マイクライアントセッション (RX 移行済み)
- 2 セッション定義をダブルクリックします (または、右クリックして **[起動]** を選択します)。

注意: 旧来の Reflection X クライアント接続で複数のサーバインスタンスを使用していた場合や、通常、複数の X クライアントを同時に実行する場合は、1 つのセッションを起動し、このセッションに追加のクライアントを接続させると、これらのクライアントを起動できます。詳細については、Reflection X Advantage ヘルプの「*旧来の Reflection X からのアップグレード*」を参照してください。
